

コミュニティ通訳

今回は、言語権を保障するための人的支援として、通訳に注目する。

水野真木子（みずの・まきこ）は「在留外国人の言葉の問題」「コミュニケーションの齟齬（そご）の問題」について、つぎのようにのべている。

外国人登録、転入・転出届、婚姻届、離婚届、出生届などの戸籍関係、母子健康手帳給付、新生児訪問指導、就学手続きなど出産・育児関係、雇用保険、国民健康保険、介護保険、国民年金などの保険・年金関係、税金関係、ガス・電気・水道、電話などの公共サービス、公営住宅など、さまざまなことに関する窓口で、言葉が通じないことが問題となる状況は枚挙にいとまがありません。また、生活相談、心の健康相談など、さまざまな相談窓口でのコミュニケーションの問題もあります。

さらに、病気になったり怪我をしても、医者の言葉がわからない。緊急に救急車を呼ぶことすら出来ない。このように、救急時、病院での診察、検査、薬局での投薬指導などの医療に関わる場面でも、言葉の壁は大きな障害になっています。また、警察官による職務質問、取り調べ、裁判での証言などの司法関係の場面でも、言葉が通じないことは深刻な問題となります。さらに、家族で日本に住む外国人が急増していますが、その子どもたちが日本の教育制度の中でうまくやっていくには、コミュニケーションが非常に重要な要素です。多くの子どもたちが学校で授業についていけず、不登校になり、中には不良仲間にはいってしまう子どももいるという現状があるのです（みずの2008:6）。

このように言語が通じないということは生活全般にかかわる問題である。こうした生活に密着した通訳を「コミュニティ通訳」という。

たとえば病院を受診したときを想定してみよう。病院を受診するのは、からだや心に異変を感じるからである。その症状をつたえることができないければ、きちんと診断されない可能性がある。「医療通訳」は生存にかかわる問題である。「司法通訳」も、その人の人生を左右するおおきな問題である。

通訳とパターナリズム

そもそも、通訳というのはたとえば日本語話者と非日本語話者（日本語学習者）の双方を支援することである。医療通訳でも、ことばが通じなければこまるのは患者だけでなく、医師や看護師もおなじである（さわだ2006、まつの2006）。通訳を一方向的に「弱者にたいする支援」とみなすパターナリズムをなくす必要がある。なかでもとくに「弱者をたすける」というようなパターナリズムにさらされてきたのが、ろう者だといえるだろう。

自分の第一言語と相手の第一言語がちがうという点で、ろう者と聴者の立場はおなじである。ろう者は聴者の言語（よみかき、あるいは口話）を学習し、日常的に使用している。その一方、聴者には、ろう者の言語（手話）がわかる人はほとんどいない。言語的少数者であるろう者は聴者の言語を学習している。一方、聴者は手話を知らなくとも社会生活に問題が生じない。

これまで手話通訳は「耳の不自由な人をたすけるための福祉サービス」と認識されてきた。ここに聴者とろう者の権力関係がうつしだされている。じっさい、突然ろう学校に赴任した聴者の教員は、ろう学校の教室のなかでは、手話のできない「コミュニケーション弱者」となる（なかしま2013）。

聴者とろう者の「文化的媒介」としての手話通訳

木村晴美（きむら・はるみ）と米内山明宏（よないやま・あきひろ）は「ろう文化を語る」という日本手話による対談で、手話通訳者の意識について批判している。まず、木村は「これまでの手話通訳者には「ろう者を助ける」という意識があった」と指摘する。ここで、ふたりは「手話通訳は福祉活動だ」という発想を批判し、つぎのようにのべている。

米内山 「福祉労働者」という言い方でしょう。私はこの言葉には非常に抵抗を感じます。

木村 私も抵抗を感じています。通訳者とは二つの異なる言語の仲介者です。それを、「援助する」とか「福祉労働」というふうに考えているから、ろう者としては通訳者に対して警戒心をもたざるを得なくなる（きむら／よないやま1995:390）。

うえのように、ふたりは通訳者とは「言語と言語の仲介」であり、それと同時に「異なる文化の間に立って仲介すること、「橋渡し」する存在であるとする（390ページ）。このような視点は、保護するようなパターンリズムを拒否し、ろう者と聴者の対等な関係を要求するものだといえる。

このようなパターンリズムの問題は、通訳だけでなく、さまざまな関係、対人支援においても、みられるものである。パターンリズムをどこまで許容し、どこからは過剰だと判断するのかについては、議論がわかれるし、明確に線をひくことはできないものである。子育てや教育、介助や通訳などでは、「おせっかい」がすぎること、「このようにすべき」と、つよく介入してしまうことがある。それをどのようにとらえるのか。

通訳者だけでは解決できないこと一連携の必要性

コミュニティ通訳に話題をもどそう。コミュニティ通訳は生活全般にかかわることであるため、通訳ができるだけではその役割をはたせない。さまざまな制度についての知識が必要となる。ただ、そういった知識を通訳者だけに要求するのは無理がある。通訳者とはべつに「多文化ソーシャルワーカー」のような人材も必要である（いしかわ2011）。杉澤経子（すぎさわ・みちこ）は、つぎのように説明している。

「在留資格の変更はどうしたらできるのか」「賃金不払いのまま解雇された」「離婚をしたい」「日本で高校に行くにはどうしたらいいか」等々、定住する外国人の増加に伴って、自治体等には様々な相談が寄せられるようになった。在留資格など制度上の問題や言語・文化の異なりによって生起する問題に的確に対応するためには、言語・文化的マイノリティを日本社会に橋渡しができる通訳（コミュニティ通訳）とともに、外国人特有の問題に精通し、適宜専門家につなげられるスタッフ（コーディネーター）がいなければ問題の解決は難しい。

法務省が、東京都新宿区に2009年11月16日に開設した「外国人総合相談支援センター」では、7言語の通訳兼相談員とコーディネーターが配置され、外国人住民の生活相談全般に対応している。来訪者も多いが電話相談も全国から寄せられている。各地の自治体から通訳支援を求められれば、相談者、自治体職員、通訳の3人が同時に通話できるトリオフォンを使って通訳にあたり、労働問題や離婚、教育、心の問題など専門家の支援が必要な場合には、コーディネーターがネットワークを駆使して問題解決に当たっている（すぎさわ2011:194）。

これは、言語にだけ焦点をあてるのではなく、その人の生活に注目する必要があることをしめしている。この「外国人総合相談支援センター」の設置は、これまで一部の地方自治体で独自に実施されていた「外国人相談」がネットワーク化されたという点でおおきな意味がある。そして、もうひとつ重要な点は、多文化社会をささえる業務や職業が生まれはじめていくということである（195ページ）。医療通訳も、そのひとつといえるかもしれないが、報酬の面からすれば医療通訳は職業といえるほどの地位にはない。現状では、「有償ボランティア」程度のものである。

医療通訳の世界

現在、医療通訳は自治体とNPOの共同事業として、一部の地域で実施されている場合や、ごく一部の病院で専属の通訳者を雇用するかたちで実施されている。ほとんどの場合、「MICかながわ」や「多文化共生センターきょうと」、兵庫県の「多言語センターFACIL（ファシル）」などのNPOが自治体をうごかすかたちで開始されたものである。そのため「業務」としての医療通訳は、一部の地域のとりくみにとどまっていた（くわしくは『自治体国際化フォーラム』2012年276号（特集「医療通訳」）掲載の無記名記事「都道府県・政令指定都市における医療通訳の現況について」を参照のこと）。近年では厚生労働省が医療通訳について積極的にとりくんでいる。くわしくは、厚生労働省の「医療の国際展開のトピックス」というページで近年のとりくみが一覧できる。（https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/topics_183886.html）。

愛知県では2011年の10月から医療通訳の派遣を実施している。「あいち医療通訳システム推進協議会」のウェブサイト参照してほしい（<http://www.aichi-iryoku-tsuyaku-system.com>）。愛知県の場合はNPOとの共同ではなく、自治体と大学が連携するかたちで運営されている。現在、名古屋外国語大学、愛知大学、愛知県立大学が言語別に分担して

医療通訳者を養成している。愛知県立大学のとりくみは、「医療分野ポルトガル語スペイン語講座」のページに詳しい (<http://www.ist.aichi-pu.ac.jp/lab/qua/com-medico/>)。

大阪府は2019年から「多言語遠隔医療通訳サービス」を実施している (<http://www.pref.osaka.lg.jp/hokeniryokikaku/osakagaikokujiniryoyo/gaikokujincallcenter.html>)。

厚生労働省も、委託事業として「希少言語に対応した遠隔通訳サービス事業」を実施している (https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kenkou_iryoyou/iryoyou/newpage_00002.html)。

医療通訳とは具体的にどのようなことをするのだろうか。『医療通訳入門』の「はしがき」で連利博（むらじ・としひろ）は、つぎのように説明している。

…在日外国人が日常生活を送るなかで直面する大きな問題は健康の問題であり、医療機関にかかる時である。その最大の問題が言語のバリアである。医療においては、症状の表現が特殊であり、通訳者には専門用語の知識とある程度の医学的知識が求められる。また、病気の理解のみならず日本の医療システムや社会福祉支援制度の理解が要求される。さらに極端な言い方をすれば命がかかっている問題を扱うだけに、通訳する側にも何らかの責任を求められる可能性もあり、これらの点で医療通訳は特殊であり、また当然のことながら通訳者の倫理が問われることになる。通訳者が全くの黒子に徹することが要求される司法通訳と異なる点は、文化の違いなどにより直訳だけでは意思疎通が不十分であると判断すれば、積極的に言葉を尽くして介入しなければならない。言い換えれば、医師や患者に対して節度ある助言や感情移入が必要となることもあり得るとのことだ（むらじ 2007:3）。

この説明をみると、医療通訳者は「知識と倫理と感情」の面で専門性がもとめられることがわかる。以下では、医療通訳がなぜ必要なのか、そして、どのように医療通訳の質を確保するのかについて検討する。

ことばが通じなければ安心して受診できない

1996年に発表された「聴覚障害者に受療抑制はあるか？ 手話通訳者を配置した病院の来院状況から」という論文がある（きたはら ほか1996）。これをみると、病院に専属の手話通訳者がいることが重要であることがわかる。

日本では札幌病院がはじめて専属の手話通訳者を雇用了。すると「札幌市内の聴覚障害者の受療が札幌病院に集中する状況が生じた」という（105ページ）。通訳者がいるという安心感がそのような状況をうみだしたといえる。逆にいえば、ことばが通じなければ安心して病院を受診できないということである。著者の北原らはつぎのように結論づけている。

聴覚障害者の受療権を保障するためには、手話通訳派遣制度の充実とともに、住民の通院圏を考慮して主要な医療機関に手話通訳者を配置すること、しかも、通訳者が過労のため健康を損ねることのないよう人員配置が必要であり、当然のことながら、これらに対して公的な支援がなされるべきである（106ページ）。

通訳者は労働者であり、適切な労働環境で仕事をする権利がある。「やりがい」や「使命感」だけでできるものではない。対人支援職は仕事の性質上「がんばってしまう」傾向にある。その点に注意して、労働環境を整備する必要がある。それは持続可能な労働環境にすることである。

なお、手話通訳をうけられる病院については、「手話通訳設置医療機関リスト」が参考になる (<http://deaf-med-net.news.coccan.jp/iryoyoukikann.html>)。

プロ（専門職）がいなければ、「にわか医療通訳」がうみだされる

シリム・ネザマフィの短編小説「拍動」は、日本で生活して5年になるアラビア語話者が、日本語とアラビア語をはなせるというだけで病院と警察の現場検証での通訳を依頼されるという状況をえがいている（ネザマフィ2010）。主人公は、通訳者としての技術も倫理規定も知らない。事故にあった本人やその家族との面識はなく、ただ、「家族の方が心配でしょうから出来るだけ柔らかめに訳してあげて」（106-107ページ）という依頼者のことばに忠実であろうとする。そして、板ばさみになって葛藤することになる。

日本では、患者の家族や友人が病院につきそい通訳することが多い。そして、こどもが通訳をする場合もすくなくない。多言語センターFACILが2012年に制作したDVD『病院に通訳がいたらいいのになー神戸のベトナム人中学生編』はそのような状況を紹介している。

また、2012年12月に、神戸市看護大学は医療通訳研究会と共催で「通訳を担うこどもたち 医療とコミュニケーション」というフォーラムを開催した。フォーラムでは、移民2世だけでなく、ろう者を親にもつ聴者（コーダ）も登壇した。こどもが通訳を担ってきたこれまでの状況をふまえたうえで、医療通訳を制度化する必要がある。

永田文子（ながた・あやこ）らは家族や友人による通訳を「にわか通訳者」と表現し、「にわか通訳者を介すことによる問題」をつぎの3つに整理している。

- (1) 通訳の場面で省略、追加、言い換えが行われている危険性があり、正確性に問題がある。
- (2) 医療専門用語は日常生活の語彙ではないため、にわか通訳者の用語は不足している。
- (3) にわか通訳者は過酷な告知を患者にしなければならない、心理的負担がかかる（ながた2010:164-165）。

たとえば、こどもが親に「がんの告知をする」という状況がうまれてしまう。あまりにも負担がおおきすぎるといえるだろう。そもそも医師であっても、深刻な病状を患者に告知するのは緊張がともなうものだろう。感情に左右されずにきちんと通訳することも、通訳者にもとめられる専門的な技術のひとつである。通訳という行為には、感情労働がともなう。業務をするうえで自分の感情をコントロールしなければならないということだ。

医療通訳の社会的位置づけ

現在、日本では医療通訳はどのように位置づけられているだろうか。水野真木子がつぎのように指摘している。

医療通訳は人の生命や健康を扱っているという点で、たいへん質の高い通訳者が求められる分野である。しかし、報酬などの点ではボランティア・ベースであると言わざるを得ないのが現状である。このような、求められるレベルの高さと報酬の低さというアンバランスが医療通訳者の立場をわかりにくくしており、個人や団体ごとに通訳者の役割や立場についても考え方が異なるのが現状である（みずの2011:230）。

このような問題をどのように解決するのか。西村明夫（にしむら・あきお）は「だれが通訳の経費を負担すべきか」という視点から、つぎのように議論している。

通訳人材の確保の問題は通訳報酬が生計を立てられる程度に適正化すれば解決する。NPOの財源不足の問題も…中略…通訳報酬に事務経費を上乗せして患者または医療機関に請求できれば解決する。だが、そもそも医療通訳経費を負担すべき責任主体はだれなのだろうか。日本語が十分でないことに責任と負担を求める考えもあるが、手話も言語の一つとすれば、採用しがたいと思われる。むしろ、十分な意思疎通は医療行為の範疇であると考え、その負担は医療費の中で賄われるべきであるとするのが適当だろう。実際に、患者に負担を求めると受診抑制が働き重症化してから受診することになり、かえって医療費が高額となることや患者が通訳の受入を拒否してカタコトの日本語で済ませることになり、医療リスクが高まってしまう。

医療費の中で賄うとして、ひとまず医療機関に負担を求めるにしても、医療機関には通訳報酬と事務経費を負担する財源がない。つまり、医療機関は、一部患者負担を含めた公的医療保険の診療報酬と駐車場代などの付帯的な収入で経営されているが、厚生労働省保健局の通知（平成17年〔2005年のこと一あべ注〕9月1日）によって通訳経費は診療報酬点数に含めないこととされているため、各地域で現在支払われている通訳報酬は、医療機関の収益を減じる形で賄われている。これが医療機関が経費負担に消極的な理由であろう（にしむら2012:93）。

西村は、「医療におけるコミュニケーションは医療行為の一環であると考えれば、保険制度の中で対応するかどうかは今後の議論に任せるとしても、医療通訳経費は在日外国人支援費としてではなく医療費の中で対応すべきであろう」と主張している（93ページ）。そうなれば、在日外国人も、ろう者も同一のルールと枠組みで医療通訳をうけられるようになる。全国一律のルールをさだめることもできる。遠隔通訳を活用すれば、通訳者不足の問題も解消できるだろう。なお、日本遠隔医療学会には、遠隔医療通訳の分科会がある。

だれでも、いつ、どこにいても、医療をうけられる体制をつくることが重要であり、医療通訳はその一環であるといえるだろう。

医療の多言語化—医療通訳以外のとりくみ

多文化共生センターひょうごは、『多言語版 救急時情報収集シート』を作成した (<http://www.tabunka.jp/hyogo/119/>)。ウェブサイトでの説明をみてみよう。

- ・日本語によるコミュニケーションが不十分な外国人の救急患者が発生した際に、患者や家族などと救急隊員の間で意思疎通を迅速にはかるための「指さし式」の対訳集です。
- ・救急隊の行動を説明し、必要な情報（症状、患部、既往歴など）を把握するための「情報収集シート」と、救急現場で使う「医療用語集」から構成されています。

神戸市の救急車（31台）全車に配備されているという。

AMDA国際医療情報センターは、電話医療相談や電話医療通訳などを実施している (<https://www.amdamedicalcenter.com>)。

愛知県は『医療機関等外国人対応マニュアル』をウェブで公開している (<http://www.aichi-iryoku-tsuyaku-system.com/manual/>)。

現在、各地で自治体や国際交流センターなどが無料で医療相談／健康診断を実施している。そのさいに通訳を準備している場合もある。また、「病院 外国語」でウェブを検索すれば、日本語以外の言語に対応している病院について、自治体や国際交流協会が情報提供しているのが確認できる。逆に、「日本語対応 病院」と検索すると、日本語が通じる海外の病院が確認できる。

そのほか、以下のように多言語問診票やスマートフォンのアプリによる多言語問診やコミュニケーション支援もある。

■多言語問診票

多言語問診票 - 横浜市港南国際交流ラウンジ

<https://www.konanlounge.com/multilingual/medical-questionnaire-多言語問診票/>

多言語医療問診票 - かながわ国際交流財団

<http://www.kifjp.org/medical/>

多言語問診票 - 岩手県

<https://www.pref.iwate.jp/kyouikubunka/kokusai/tabunka/1006855.html>

多言語 問診票 - 外国人医療センター (MICA)

<http://npomica.jimdo.com/日本語/多言語-問診票/>

多言語問診票 kindle (キンドル) 版 (有料) - 地域診療情報連携協議会

<http://www.amazon.co.jp/> で「多言語問診票」を検索

■多言語問診／看護師支援アプリ

多言語問診システムM3 (エム キューブ) (Android版のみ)

多言語問診票。多文化共生センターきょうとと和歌山大学システム工学部吉野研究室の共同開発。

EXLanguageNurse - 多言語医療通訳アプリ (iOS版)

4言語の基本会話、動作指示、問診の音声登録している。エスケイワードが名古屋大学、刈谷豊田総合病院と共同開発。

参考文献／関連文献

- あべ やすし 2012 「医療通訳—文献リストと関連情報」 <http://hituzinosanpo.sakura.ne.jp/iryoo.html>
- あべ やすし 2015 『ことばのバリアフリー—情報保障とコミュニケーションの障害学』生活書院
- 石河久美子 (いしかわ・くみこ) 2011 「多文化ソーシャルワーカー養成の現状と課題」近藤敦 (こんどう・あつし) 編『多文化共生政策へのアプローチ』明石書店、181-192
- 石河久美子 2012 『多文化ソーシャルワークの理論と実践』明石書店
- 石崎正幸 (いしざき・まさゆき) 2007 「米国の医療通訳」むらじ監修『医療通訳入門』松柏社、55-87
- 市田泰弘 (いちだ・やすひろ) 2005 「手話通訳」真田信治 (さなだ・しんじ) / 庄司博士 (しょうじ・ひろし) 編『事典 日本の多言語社会』岩波書店、155-157
- 糸魚川美樹 (いといがわ・みき) 2017 「多言語化の多面性—一言語表示から通訳ボランティアまで」かどや・ひでのり / ましこ・ひでのり編『行動する社会言語学—ことば／権力／差別 2』三元社、205-224
- 小笠原理恵 (おがさわら・りえ) 2019 『多文化共生の医療社会学—中国帰国者の語りから考える日本のマイノリティ・ヘルス』大阪大学出版会
- 河原俊昭 (かわはら・としあき) 編 2004 『自治体の言語サービス—多言語社会への扉をひらく』春風社
- 川村千鶴子 (かわむら・ちづこ) 編 2017 『いのちに国境はない』慶應義塾大学出版会
- 北原照代 (きたはら・てるよ) ほか 1996 「聴覚障害者に受療抑制はあるか？手話通訳者を配置した病院の来院状況から」『社会医学研究』14、103-107
- 木村晴美 (きむら・はるみ) / 米内山明宏 (よないやま・あきひろ) 1995 「ろう文化を語る」『現代思想』23(3)、363-392
- 木村晴美 / 岡典栄 (おか・のりえ) 2019 『手話通訳者になろう』白水社
- 国立国語研究所「病院の言葉」委員会 2009 『病院の言葉を分かりやすく—工夫の提案』勁草書房
- 沢田貴志 (さわだ・たかし) 2006 「医療通訳は誰のため？」外国人医療・生活ネットワーク編『講座 外国人の医療と福祉—NGOの実践事例に学ぶ』移住労働者と連帯する全国ネットワーク、54-57
- 渋谷智子 (しぶや・ともこ) 2009 『コーダの世界—手話の文化と声の文化』医学書院
- 杉澤経子 (すぎさわ・みちこ) 2011 「多言語・多文化社会における専門人材の養成」近藤敦 (こんどう・あつし) 編『多文化共生政策へのアプローチ』明石書店、193-208
- 角知行 (すみ・ともゆき) 2017 「アメリカにおける多言語サービスと言語アクセス法—クリントンの大統領令13166をめぐって」『社会言語学』17号、1-17
- 鳥飼玖美子 (とりかい・くみこ) 編 2013 『よくわかる翻訳通訳学』ミネルヴァ書房
- 中島武史 (なかしま・たけし) 2013 「聾学校におけるろう児と教師の関係性と低学力」『社会言語学』13号、85-112
- 永田文子 (ながた・あやこ) ほか 2010 「在日ブラジル人が医療サービスを利用する時のにわか通訳者に関する課題」『国際保健医療』25(3)、161-169
- 中村安秀 (なかむら・やすひで) 2012 「ことばと文化の壁を越えて—在住外国人の保健医療に関する課題と挑戦」池田光穂 (いけだ・みつほ) 編『コンフリクトと移民』大阪大学出版会、137-152
- 中村安秀 / 南谷かおり (みなみたに・かおり) 編 2013 『医療通訳士という仕事—ことばと文化の壁をこえて』大阪大学出版会
- 西村明夫 (にしむら・あきお) 2012 「医療通訳派遣システムの促進要因」『移民政策研究』4号、83-96
- ネザマフィ、シリム 2009 『白い紙／サラム』文芸春秋
- ネザマフィ、シリム 2010 「拍動」『文学界』6月号、98-137
- 橋内武 (はしうち・たけし) / 堀田修吾 (ほった・しゅうご) 編 2012 『法と言語』くろしお出版
- 松野勝民 (まつの・かつみ) 2006 「医療通訳の公的制度を求めて」外国人医療・生活ネットワーク編『講座 外国人の医療と福祉—NGOの実践事例に学ぶ』移住労働者と連帯する全国ネットワーク、57-58
- 丸山正樹 (まるやま・まさき) 2011 『デフ・ヴォイス—法廷の手話通訳士』文春文庫
- 水野真木子 (みずの・まきこ) 2008 『コミュニティ通訳入門』大阪教育図書
- 水野真木子 / 内藤稔 (ないとう・みのる) 編 2015 『コミュニティ通訳』みすず書房
- 水野真木子 2011 「日本におけるコミュニティ通訳の現状と課題」佐藤 (さとう) = ロスベアグ・ナナ編『トランスレーション・スタディーズ』みすず書房、223-246
- 村岡啓一 (むらおか・けいいち) 1995 「通訳を確保する義務の主体は誰か？—外国人刑事事件からみえてくるもの」『季刊刑事弁護』4号、30-34
- 村松紀子 (むらまつ・のりこ) ほか編 2015 『実践医療通訳』松柏社
- 連利博 (むらじ・としひろ) 監修 2007 『医療通訳入門』松柏社

関連サイト

今村かほる方言研究チーム 医療・看護・福祉と方言 <http://hougen-i.com>

医療・福祉・介護従事者と方言プロジェクト <http://ww4.tiki.ne.jp/~rockcat/hoken/>

国立国語研究所 東北方言オノマトペ用例集 <https://www.ninjal.ac.jp/publication/catalogue/onomatopoeia/>

用語解説

医療観光（メディカル・ツーリズム）：国策、あるいは病院の戦略として外国から患者を誘致しようとするところがある。その場合、ことばの不安があれば利用者数は増加しない。そこで医療通訳をつける。ビジネスモデルとして医療通訳が実施されている。たとえば韓国では医療観光ビザの人は入国審査時も特別ゲート（外交官とおなじ）を利用できる。

遠隔通訳：電話をつかった通訳、あるいはパソコンやタブレットPCの通信機能（スカイプなど）をつかった通訳。通訳者にとっては、遠隔通訳なら感染症のリスクやレントゲン時に通訳者の被曝（ひばく）をさけることができる。通訳をうける側（患者と医者）にとっては、通訳者が側にいたほうが、安心できるとか質問しやすい場合があるかもしれない。パソコンやタブレットをつかった遠隔通訳なら、手話通訳をすることもできる。

コーダ（Children of Deaf Adults）：ろう者を親にもつ聞こえる子ども。ドイツ映画『ビヨンド・サイレンス』、『コーダの世界―手話の文化と声の文化』（しづや2009）など。親子ともにもろう者の場合、デフファミリーという。

コメントの紹介

…「東日本大震災における多言語情報」の土井佳彦さんの文章において、外国人に直接聞いた話で「あまりにも情報が多すぎて、何を見聞きしていいのかわからない」という話がありました。これについて、現在のコロナ禍でも私も同意できるところがあります。現在、コロナについて様々な情報が飛び交っています。例えば、少し前の話ですが、紙が不足する、というデマや、納豆がコロナ予防に効果的だ、など本当に信用できるものなのかわからない情報を多く耳にしました。このように多くの情報に溢れており、私も何を信じていいのかわからなくなってきてしまいました。日本に住んでいる外国から来た人にとっても、この状況は同じでしょう。このような状況の中、重要な情報を見逃すことのないように、私自身も情報をしっかり吟味していく必要があると思いますが、資料より「情報の信頼性だけでなく、『だれが伝達するのか』という関係性が重要な意味を持つ」とあるように、これからのためにも、外国人の方は自分の周りで信頼できる人間関係が整えられる環境づくりも社会の中で重要だと感じました。…

私は研究各論（アジア・新興国論）という授業を履修していて、東南アジアの言語について少し勉強しました。そこで、オーストロネシア語族について説明があり、フィリピン語、インドネシア語、マレー語などが含まれると知りました。マレーシアへの留学経験から、呼称は違うけど、マレー語とインドネシア語がほとんど同じであることを知っています。現在、インドネシア語も履修していますが、マレーシアで使っていたマレー語の知識によって、困難な点もなく、今のところちょっとした単語の違いくらいしか見つけていません。マレーシアの友達は「インドネシア人と話すのは方言が違うマレーシア人と話しているのと同じ感覚」と言っていました。そこまで似ていても別の言語として日本語でも区別しているし、インドネシア語、マレー語でもbahasa Indonesia と bahasa Melayu と区別しています。私は実際に学んでみて、三河弁（私は三河弁を話します）と先生が動画内で使っていた岡山弁（岡山語）よりも違いがないと思いました。このことを考えると、「言語」という括りはとても曖昧だと感じます。また、中学生のとき、東京の大学に通っていた先生が、「ドベ」（最下位の意味）を使うと笑われるよと教えてくれたことがあります。当時は、東京への憧れも強く、直した方がカッコいい、標準語に変えようと思ったこともありました。ですが、今思うと、笑われる＝馬鹿にされているということではないかと感じます。よくテレビ番組でも汚い方言ランキングやかわいい方言ランキングがありますが、言葉に優劣があるとする見方そのものが間違っていると思います。これは私の考えですが、もし、都が京都のままだったら、標準語は京都の言葉になっていたはずで、もしそうなら、今標準語になっている東京の言葉は方言になっていたかもしれないわけだから、標準語を話す人が偉いなんてことはないはずで、言葉が違うことはコミュニケーションにおいて障害になってしまうこともあるし、世界中の情報が手に入る時代で、公用語は不可欠な部分はあるけど、言語に順位をつけ、下位なものがなくなっていくことは文化の否定に値すると思いました。

私は岐阜県可児市出身なのだが今回の授業資料の補論に岐阜県可児市の取り組みについて書いてあった。日本地域番付 (<http://area-info.jpn.org/>) によると、可児市と隣的美濃加茂市、坂祝町は岐阜県の中でも外国人の数がトップ3であった。岐阜新聞Web (<https://www.gifu-np.co.jp/tokusyuu/chuno/20171107-22836.html>) にもあるように、可児市の土田には学校に通う前に日本語を学ぶ、ばら教室KANIというものがある。また、東濃高校には外国人が多く進学するため各学年に国際クラスという日本語を学べるクラスが設置されている。ここからは私の経験なのだが、小中学生の時には参観日や運動会、入学式、卒業式などの行事では日本語のわからない保護者のために校内放送が日本語だけでなく通訳の先生による英語、ポルトガル語、タガログ語もあった。この取り組みについて私は助かっている人も多いのではないかなと思うので広まってくると良いと思う。ただ、やはり不就学は問題になっていて、学校にいる外国人の子は新たに入ってきたり途中で学校に来なくなったりと人が入れ替わっていることが多かった。しかし、中学生の時仲良くしていたフィリピン人の女の子は今年専門学校に進学していたり、高校が同じだった韓国人の女の子も私立大学に入学したりと昔に比べて支援も増えて進歩しているのではないかなと思う。

資料にある「ひとつの言語」とは何かについて、同じクラスに何人かのフィリピン人の子がいたのにその子たち同士はフィリピン語での会話をしていなかったり、通訳を頼んでもできないということがあった。それはフィリピンでは地域によって通じないほど異なる言語を話しているからと、あるフィリピン人の友人が言っていた。このような多言語国家では言語の区切りが難しいと思った。

…私の地元浜松は全国的に見て比較的外国人の多い地域です。なので外国人の子と同じクラスになることも多々ありました。恥ずかしながら、外国籍の子供の不就学をゼロにするという取り組みが、地元で積極的に行われていたことを今回の講義で初めて知ったのですが、今思い返すと確かに外国人の子供に対する支援は結構充実していたのかなと思います。具体的な支援としては、授業中、外国人生徒に支援員の方がマンツーマンでついてサポートしていたことや、放課後に外国人生徒を集めて日本語の授業を実施していたことなどです。文化も制度も全然違う環境で不安な彼らにとってとても心強かったのではないかなと思います。実際に不就学児童数を減らすためにどのような政策が行われてきたのかを調べたところ、不就学の子どもの家庭へ通訳と共に訪問して面談をしたり、経済的な問題を抱える家庭に対しては就学援助の制度を案内するなど、家庭で異なる状況に柔軟に対応してきたことが分かりました。(参考：浜松市における「外国人の子どもの不就学ゼロ作戦事業」について www.clair.or.jp/j/forum/forum/pdf_301/14_culture.pdf …

…私の住む愛知県岩倉市は特にブラジル人が多く住んでいます。そして、小学校や中学校には「日本語教室」というものがあり、日本語とポルトガル語を話すことができる先生方がたくさんいます。今回の、「多文化社会における教育の問題」の部分の資料を読み、外国籍の子供が多くいる岩倉市の取り組みについて知りたくなり調べました。すると、「岩倉市日本語適応指導教室」というホームページがありました。ここには、外国籍の子供への指導に関するものや保護者向けのものなど様々なことが細かく書かれています。国語や算数のテキストも見ることができ、プレスクールの案内ではスペイン語、ポルトガル語、英語、中国語、日本語の五言語のバージョンがあり、新型コロナウイルスについての翻訳文書もありました。ここには書ききれないほどのたくさんの情報が掲載されていて、外国籍のこどもや保護者、さらに各教科の指導項目や日本語指導用書籍・教具リストも載っているので、学校の先生にもわかりやすいホームページになっていると思います。なかでも、私が強く印象に残ったのは、「日本語・ポルトガル語適応指導教室」というところにある「目的」の④に「ブラジルへ帰国する児童生徒や、母国語を忘れ、親とのコミュニケーションを図れなくなることを防ぐために、ポルトガル語の指導もする。」とあったことです。これは、あべ先生がおっしゃった「ランゲージ・シフト」が起こらないための取り組みであり、こどもたちのアイデンティティを保つことでもあると思います。そして、私が中学生の時、給食でブラジルの「フェイジョアード」という料理がでたり、文化祭では外国にルーツをもつこどもたちが母国に関するクイズを全校生徒に向けてだしてくれましたが、それらもアイデンティティを保ち、「ちがいを尊重するための取り組みであると思います。「ちがい」を否定するのではなく、「ちがい」を受け止めて、その「ちがい」を大切にすることが外国籍のこどもたちの自信にもつながるのではないのでしょうか。

”岩倉市日本語適応指導教室” <http://www.iwakura.ed.jp/nihongo/frame.htm>

…浜松市にある外国人学校「ムンド・デ・アレグリア」のホームページ(http://www.mundodealegria.org/schoolintroduction/message/schoolintroduction/message_205.html)の中で見つけたもので、日本にいるペルー人の子供が母語が学べないためペルーでも日本でも外国人といわれるという話がありました。自分の第一言語がはっきりしないと、自分の居場所が分からなくなったり、なくなったりしてしまうのです。日本の外国人学校が日本語教育だけでなく、生徒の母語教育にも力を入れる必要があることを強く感じました。また、言語は単にコミュニケーションの手段ではなくて、自分がどういう人間なのか表現するための手段でもあると思いました。

中学二年生の時、海外から日本語の話せない子が転校してきました。…クラスのみなら親切に転校してきた子にジェスチャーなどつたない英語でわからないことや日本語を教えていたので、その子がクラスで浮いてしまうことはありませんでした。授業も数学や理科などは一緒に受けていましたが、国語の時間には別室で日本語を勉強していました。テストでは、一緒に受けていた授業も彼女用の問題が英語で書かれている問題用紙で同じ内容を受けました。おそらくとても勉強したのだと思いますが、二年生の終わりころには彼女は普通の会話はもちろん、流行りの言葉などもわかるくらいになっていました。それからクラスも変わってしまいなかなか話すことは出来なかったのですが、高校生になって偶然会ったときには、イントネーションも綺麗でとても上達していたことに驚きました。日本語を話すことができない子供たちだけで学ぶ学校も良いですが、地域の一般的な学校に通うことも、彼女のように普通の授業と日本語の授業を並行して行うことでできると思います。みんなと同じ授業に遅れることなく、同時に日本語も話せるようになるこの形は非常にいい形だと私は思います。私たち受け入れる側の姿勢によってその子の学校への馴染みややすさは変化すると感じました。

【あべのコメント：そういった別室の授業を「取り出し授業」といいます。教室に学習支援員が入るかたちを「入り込み授業」といいます。一方で、外国人のこどもが特別支援学級などに配置されている場合もたくさんあります。】

…YouTubeの配信で言語権について、自分の言語に愛着が持てず、言語の乗り換えが生じることがあるという話を聞いて、以前サイニーで「保育 多文化」と検索したときに、フィンランドの保育に関する論文を読んだときのことを思い出しました。もう1度読み直してみると、フィンランドの保育現場では移民の子どもに限らずフィンランド語を母語としない子どもに対しても母語の保持を尊重する取り組みが行われているそうです。フィンランドでは移民の子どもだけではなく、外国にルーツを持ちフィンランド語を母語としない子どもも対象にフィンランド語第二言語教育が行われており、家庭では母語を話し、園ではフィンランド語の習得のサポートを行なっています。子どもが園での生活に慣れていき家庭で母語を話す機会が減ってしまうと、親子間のコミュニケーションが希薄になってしまうことを危惧し、フィンランドでは保育者が子どもの保護者に対して家庭では母語を話すように、母語の保持を促すことが多いそうです。言語環境が区別されていて、家庭での母語環境の確保が重視されているということでした。(石塚麻衣 2018『多文化共生保育における保育者の専門性ーフィンランドの保育実践に見る日本の課題ー』聖心女子大学大学院論集)…

私はレジメに乗っていたなぜ外国籍の子が不就学児になるのかというトピックにとっても共感しました。なぜなら私もそのような経験をしたことがあったからです。私の国籍はずっと日本でしたが人生の半分くらいは中国に住んでいました。小学六年生に日本に帰国し、一応国籍は日本ですが、全く日本語がわからなかったのが、外国人とほぼ変わらない状況でした。今だから言えることですが、日本語が全く話せないのに、普通の日本人学校に通っていた最初の一か月間は地獄でした。思春期真ただ中で、周りのみんなが何を話しているのかも全くわからないし、もちろん自分から話しかけて友達を作ることもできず、最初に覚えた母から教わった唯一の言葉“これ何？”という言葉を使って、頑張っクラスメイトに質問したら、優しい子は教えてくれましたが、何回か馬鹿にされたこともあり。全く言葉の知らない世界に投げ込まれたこと自体がとてもストレスでした。こういう日々を過ごして気づいたら、学校に行くのが怖くなって、行きたくない……と思うようになりました。私の場合、レジメに書いてあったように、学習意欲がなくなっていくというよりも、全く知らない世界にいて精神的に疲れていたのかもしれない。言語というものがわからないだけで相当生活に支障が出てしまうのだなと思いました。今のように流ちょうに日本語が話せるようになったのはいつだったかわかりませんが、昔当たり前のように話せていた中国語が下手になってきているのは確かです。これはまさに授業で話していたラングエッジシフトでしょう。気づいたら主流言語である日本語しか話さず、家族から中国語で話しかけられても日本語で答えるようになってしまいました。せっかく学んだ言語をたった八年間で忘れてしまうのは悲しいことです。

私も、言語の名称を国と一致させていることに違和感を抱いている。というのも、私は今スペイン語を学んでいるのですがメキシコへの留学を考えていました。スペイン語圏がどこか分からない人にメキシコに行くと行ったら「なぜスペインに行かないの」とほぼ100%言われました。日本人にとって中南米にあるメキシコより、ヨーロッパのスペインの方が身近に感じるということもあると思いますが、それよりもまず「スペイン語」という名称である以上、スペインの言葉であると主張しているようなものである点がおかしいと思います。…

【あべのコメント：日本人が住んでいる人数もスペインよりメキシコが多いですね。メキシコには日系人コミュニティもある。メキシコに工場をたくさんつくっているの、今後日本とメキシコの関係は重要になってくるはずです。】

私は外国人留学生の友人がいます。コロナ対策支援として政府から10万円給付が行われ、外国人留学生も日本国民と同様に給付対象とされました。そこで1つ気になったのが、給付申請の申請書が全て日本語で書かれているという点です。私の友人は現在日本語を学習中なのですが、漢字は日本語学習者にとって難しいので読み書きすることができず、私に助けを求めました。このように困っている留学生が他にも大勢いると思います。日本語で全て書かれた申請書ではなく、外国人にも配慮したものにするべきだったと思います。

講義資料より、「日本語の「外国語」という言葉について日本に存在する多様な言語を無視したもの」とありましたが、英語の“foreign language”のようにどの国にも「外国語」という言葉があり「外国語」という概念が存在しているためこの表現の仕方には違和感を感じました。…

【あべのコメント：日本語で「異言語」という表現は研究者くらいしか使用していませんが、英語の「another language」はよくある表現として定着していると思いますよ。「母国語」とか「外国語」という雑な概念で社会言語学の話題を議論することはできないのです。一般的な表現としてはそれでいいとしても、研究の世界では通用しない。厳密さがなく、現実との矛盾が生じている。マイノリティを無視せず、「例外」が生じない用語を使用することが大事。】

…「日本手話」というものを言語の一つとしてみるのならば、一般教養の講義として、あるいはその中でも第二外国語(この呼び方だとまたおかしくなってしまうので第二言語など)として学べるようになっていてもいいのではないかと思った。…

【あべのコメント：あげ足とりになりますが、第二外国語をいにかえるなら、第三言語ですよ。第一言語＝母語。】

…私は公衆トイレの個室にある表記にいつも注目してしまいます。そこには毎回と言って良いほど、英文法が間違っていたり、情報が少なすぎたり、地方の講習トイレを使うと日本語以外の言語が書いていない時すらあります。私はいつもこの間違いや不足を見て、日本はやはり日本語話者のことを中心に考えているなどと思います。英語は大抵あったとしても、ブラジル人がたくさんいるのにポルトガル語とか増やせばいいのにはと思います。また、こういった注意の文章にしか訳が書いてなくて、読んでる人が得するものには書いていないことがおかしいと思います。例えば、クーポンや商品の説明。何のためのものかわからないじゃないですか。…

…ランゲージシフトについてですが、「マイノリティな言語を恥ずかしく思い、日本語を話せるようになる」と思わせてしまったのは社会のせいかもしれませんが、「なろう」と思うのは個人の自由でもあるように思います。非日本語話者が日本語を話すようになるのはそのひとが考え努力した結果であって、マイノリティな言語を大事にしてほしい、というのはある意味押し付けのように感じました。マジョリティ、マイノリティ関係なく母語を使って不自由なく暮らせる社会は理想的だとは思いますが…

【あべのコメント：自分の言語が維持できる社会かどうかは、社会の指標のひとつであるといえます。自死にしたって、個人の自由意思ということはできますが、かならず社会的要因があります。そして、社会的要因は放置しておいていいものではないのです。二言語使用を維持することは困難なことではないのに、日本では親の言語をまったく口にしなくなる子どもがたくさんいます。この状況を問題視することが「押し付け」のように感じる感覚は非常にアンバランスです。「家庭でも日本語で会話してくださいね」と親に「アドバイス」する例がかなりあります。「努力した結果」、親とまともに会話できなくなります。さらに、日本語があまりできない親を軽蔑するようにさえなります。ひどい状況です。】

【エスペラントについて】…国際共通語としての地位を確立するなら、点字や手話との互換性も吟味していかなければならないのではないかと素人ながら考えました。調べた限りでは、そもそも世界共通の点字は存在していないようで(一方手話はGESTUNOが世界共通な様子[4])、エスペラントの普及を実現するためには、まず人類共通の点字及びその他健常者以外にも配慮した言語を広めることが必要と感じました。個人的には将来、国際語として英語ととって代わって欲しいほどエスペラントの文法の規則正しさは魅力的に感じました。なにかと不平等さが批判される昨今において真に公正を求めるのであれば、言語さえも英語を母語とする人を鑑みると平等にならなければならないのではと考えました。

[4] <https://ja.m.wikipedia.org/wiki/国際手話>

【あべのコメント：点字と手話については第2回で説明したとおり、性質がことなるものです。点字は、6つの点を活用するという点に特徴はありますが、ともかく、音声言語の文字表記なのです。英語や日本語の点字があるように、エスペラントの点字だってあります。国際手話は国際会議などで補助的に使用されるものですね。】

今回の授業資料で警告文の日本語と他の言語で表記の仕方が異なることについて取り上げられていて、日本語では丁寧をお願いしているのに英語ではDon't を使って命令していると紹介されていましたが、私は違和感を感じませんでした。漢語、朝鮮語はわかりませんが、一年間英語圏に留学して感じることは英語で注意文や警告文を書くときに命令形を使うのは普通のことだと思います。実際に海外の注意文を調べたところ、アメリカ合衆国にあるサウナにはDo not place any combustible material on heater at any timeと書かれた注意文がありました。（参照：<https://superiorsaunas.com/products/wooden-risk-of-fire-sign?variant=39678851535>）この文を日本語で直訳した場合は「ヒーターの上に可燃物を置くな」とかなり命令的ですが、現地の方がこの文を読んだ時の感じ方は「ヒーターの上に可燃物を置かないでください」と同じようだと思います。グローバル化で多言語を使うことが多くなりますが、言葉はただの記号ではないのでその言葉が話される国の文化や風習を知った上で使用しなければ誤解や偏見を生んでしまう可能性があると思いました。また、言葉に頼りすぎずに誰でもわかるようなピクトグラムをもっと発展させるべきだと思います。東京オリンピックで使われるピクトグラムは海外の方やまだ言葉をしっかりと知らない子供でも理解できるように作られていて新しい情報伝達のツールになったと思います。地震速報はテレビ画面に小さく放送されますが、日本語のみの表記と漢字が使われているため海外の方や子供には伝わりにくいと思うのでピクトグラムを使ってすぐに緊急情報が伝わるようにすべきだと思います。例えば震度を数字だけで表すのではなく色や形をつかたり、津波や余震の警告もピクトグラムと一緒に表示して単語を知らない人にも何が起こるのか理解できるべきだと思います。

【あべのコメント：写真1の命令文は朝鮮語がわかる人にとっては、ありえないほどに、どぎつい文なんですよ。「日本語は、ていねい語になってるのに」と感じた韓国人がかなりいるでしょう。まさに「言葉はただの記号ではない」のですよね。だからこそ言語ごとに訳文の表現がバラバラになっていることも多いのですが、あれは一律に命令文。】

…5ページにある、言葉が関係性の上に機能するという話に関連して、このことの悪影響について考えました。その典型例が「詐欺」だと思います。詐欺の中でも息子を名乗るもの、本当の友達が行うものなどがそれにあたると思います。子供と親、友達同士というのは信頼の度合いが比較的高いものだと思います（色々な状況があると思いますが）。それがゆえに、「お金が欲しい」などと言われるとその言葉を信じてしまう可能性が比較的高くなってしまおうと思います。プリントの中に「身近な人を介した伝達は重要である」とあり、確かに重要だと思いますが、そのような伝達は時に害を及ぼすこともあるということを知っておくことも大切だと自分は考えます。…

言語にも様々な種類があり、ボディランゲージと呼ばれる手話や、日本語の中でも関西弁や津軽弁などの方言があります。…

【あべのコメント：手話は「ボディランゲージ」「ジェスチャー」とは異なるものです。言語です。それぞれの地域の手話に文法があり、語彙の体系があります。第2回の配布資料を復習してください。】

今回の講義を聞いてあることを思い出した。それは、私が今期とっている「手話」の講義のことだ。この講義の正式名称は「諸地域言語（アジア諸語）日本手話」である。初めてこの講義を見つけた時、同じ日本語であるにもかかわらず、諸地域言語というカテゴリーに入っていることに違和感を覚えた。シラバスを見ると「日本手話は日本語とは異なる文法体系をもつ視覚言語です。」と書いてある。手話が、発話言語としての日本語と区別をされていることが明確だ。確かに、普段話しているものと手話とでは色々な違いがあるが、それを「日本語」と「手話」のように完全に分離させた表記は一種の差別にもつながってしまう気がする。

【あべのコメント：「同じ日本語」ではありません。別の言語です。日本語と日本手話と区別することは差別にはなりません。むしろ「同じ日本語」という事実誤認は、ろう者の言語文化を否定しています。受講している授業の基本的内容は、きちんと理解してください。なお、配信で簡単に説明したように日本語とルーツが同じなのは琉球諸語だけです。】

…以前友人が教えてくれてなるほどと思ったことがあります。それは、公園などにあるトイレにある排煙装置のボタンには「PUSH」と表記がされていますが、その目的が英語では書かれていないので、知らない外国人はそのボタンを押してしまうということを教えてくれました。表記が中途半端だと困惑してしまうことを理解することができました。このようなことも直されなければならないことだと思います。

【あべのコメント：そうですね。あと、非常ボタンも。理由も説明せず「Don't Push」と書いてあったり。】

以前Twitterで見かけた注意書きのツイートを思い出した。とあるトイレでは、「トイレがつまらないようにお使いください。」の下に英語で「Please use so that the toilet is not boring.」と書いてあったそうだ。

(記事:<https://mobile.twitter.com/NurseAki4649/status/1240066035794862080>)

どうして誰も気に留めなかったのかと疑問に思うくらいおかしな文章だが、私が気づかない所でもこのような変に翻訳された注意書きが蔓延しているのだと知った。多言語による表示によって一見グローバル化された社会になったように思えるが、実際のところはまだまだであり、外国の方にとっては住みづらいことも多いのだろうと思った。今は翻訳アプリがあり、また、声を入れると勝手に翻訳して喋ってくれる拡声器などもある。最低限の意味を伝える、という点では便利かもしれない。しかし正確に意味を伝えるためには、こういった翻訳アプリや製品で翻訳できない部分を補填するためにも、言語を学ぶということは大いに意義のある学問だと思った。私はスペイン語専攻なので、日本でスペイン語による注意書きを目にしたときに、もしおかしな部分があれば、それに気付けるようになりたい。そのためにも勉強を頑張ろうと思った。

【あべのコメント：文法上は問題がない翻訳でも、語用論的には「そういう意味じゃない」という場合があります。】

…最近名古屋市営地下鉄の音声は「1番線に電車がまいります」から「1番線に電車が来ます」に変わった。普段から日本語を使用し日本語をある程度理解できる我々にとったら大したことない変化だが、日本語がかたことな外国人や小さな子どもにとっては大きな変化であり、わかりやすく感じているのではないかと思う。…

資料で、愛知県豊田市の団地の、ゴミステーションのローマ字日本語表記が紹介されていましたが、それを見て英語の情業を思い出しました。その英語の先生は外国の方で、zoomを使っているのですが、1回目の時、自分の名前の表記を日本語で漢字に設定したら、先生が「名前を読むのが難しい。誰が誰かを特定するだけですごく時間がかかる。」とおっしゃっていました。それで2回目から全員ローマ字表記に変えました。先生は、とても嬉しそうに「読むのがすごく楽になった。ありがとう。」とおっしゃっていました。私は、今までローマ字表記にしても内容は日本語なのだから、漢字でもローマ字でも大差はないと思っていました。しかし、このことがあってから、日本語が話せて漢字の読み書きが苦手な人にとっては、ローマ字表記も円滑な情報伝達のためには必要なものなのだと思います。日本語が分かる人と分からない人、と二分割するのではなく、日本語を全く話せない人、日本語を話せるけど読み書きは全くできない人、日本語を話せてローマ字は読めるけど漢字は読めない人、というように様々な人がいる可能性を考えながら、看板や案内板など、公共設備に関するものを作る必要があると思いました。

方言について、西日本では、相手に「おられますか」を使うという話がありました。私はバイト先で、実際にその言葉を耳にしたことがあります。初めて聞いた時、私は違和感を持ちました。私は岐阜県出身ですが、普段から「〇〇ちゃんがいる」というのと同じ意味で、「〇〇ちゃんがおる」と言います。「存在している」という意味です。また、「おる」は自分に対しても使います。「今どこにおる?」「ここにおるよー」といった感じです。友達同士の会話でよく使っていたので、目上の人に対して「おる」を使うのには違和感を感じました。…

【あべのコメント：「おられる」に違和感ですと…? (笑)。ちなみに、「こけーおられー」だと、「ここにいなさい」という意味になります。おられるについては、『NHK放送文化研究所』「先生は、おられますか」は、間違い?」
https://www.nhk.or.jp/bunken/research/kotoba/20170501_4.html】

多言語状況について、中国もたくさん存在している。標準語だけではなく、方言が地域による差が大きいです。私はふるさは寧波で、おばあさんのような年取る人たちが話した寧波語に対して、わからない場合もあるし、別の地域、例えば、寧波と同じ省である温州市、中国の広い地域に対して、とても近い地域ですが、温州人の方言は聞いても全く別の言語のように全然わかりません。また、中国は多民族の国で、例えばモンゴル族・チベット族・ウイグル族・朝鮮族等々、それぞれ特有な文字と言語を持っています。そして、同じ言語でも、話し方も違いがあります。例えば、北の人と南の人、同じ標準語話すときも、それぞれの特性を持っています。

【あべのコメント：わたしは南方の普通話をはなすので、北京や東北の人の発音が聞きとれないことがあります。】

…「標準語」という呼称自体、「ここではこの言葉が普通です。そうじゃない他の言葉は変わっている、変です。」という風にとることもできる。そう考えると、標準語という言葉そのもの自体、あまり良い表現ではないと思う。…

【あべのコメント：なので「共通語」という表現も、「標準語」の言い換え表現として使用されてきました。】

…特にわたしが疑問を抱いたのは、「英語」です。「英語」という漢字をみると「英」はイギリスであるが、日本で教えられている「英語」は普通「アメリカ英語」であることがほとんどで「イギリス英語」は特殊であると考えられています。また、去年英語の講義で授業をしてくださった先生がギリシャ出身の先生で、普段アメリカ英語に慣れている自分にとっては、聞き取りにくい部分がいくつかありました。英語にも様々な種類があるのに一様に「英語」と括るのはどうかなと思いました。

【あべのコメント：『英語系諸言語』という翻訳本が参考になります。原題は『The English Languages』。日本語についても『複数の日本語方言からはじめる言語学』という本があります。単一ではない、複数としての〇〇語というとならえかた。とても大事な視点です。「〇〇語」というものを相対的にとらえることが重要です。】

私は3年前にロンドンに行きました。そのときにUNDERGROUNDを利用しました。そこには日本と同じように券売機が設置されていたのですが、その券売機の対応言語数に衝撃を受けました。当時は、英語やフランス語、ドイツ語、イタリア語、(自然な)日本語、スペイン語、アラビア語、ベンガル語、中国語、ギリシャ語、グジャラート語、ヒンズー語、ポーランド語、タミール語、トルコ語、ウルドゥー語がありました。ちなみに、2年前ぐらいにポルトガル語が追加されたようです。Transport for Londonという公式サイトで調べてみたところ、2009年には既に英語からスペイン語までが対応しており、その年に新たにアラビア語以降の言語が一気に対応し始めたそうです。私はこの記事を読んで、日本はとても遅れていると痛感しました。そこで最近の日本の券売機が気になったので、金山駅の名古屋市営地下鉄、名鉄、JRの券売機を確認してみました。まず対応している他国語についてですが、地下鉄は英語、簡体・繁体中国語、韓国語の4言語に対応していました。しかし、名鉄とJRは英語しか対応していませんでした。また、どの券売機も言語変更ボタンを押すとそれぞれの言語の音声が出るのですが、地下鉄とJRは結構流暢な喋り方でしたが、名鉄は日本人が喋っていると思われる音声でした。この段階では、地下鉄が一番多言語対応に力を入れているように見えるのですが、実は駅の案内表示を見てみると名鉄も負けてはいません。例えば、「きっぷうりば」という看板の対応言語を見てみると、地下鉄は英語、簡体中国語、韓国語に加え、おそらくポルトガル語だと思われるラテン系の言語の表示がありました。そして、名鉄も英語、簡体中国語、韓国語で書かれています。さらに名鉄は、特別車の切符についての説明や主要駅の運賃案内も日本語に加えてその3言語でも書かれていました。また、地下鉄はなぜか切符の買い方の貼り紙は英語、韓国語、簡体・繁体中国語、ポルトガル語の5言語で書かれていました。ちなみにJRはどれだけ探しても日本語と英語以外の言語が見当たりませんでした。さらに、地下鉄と名鉄は路線図の全ての駅が英語表示対応なのに対し、JRは英語すら太文字表示の駅にしか書かれていませんでした。名鉄に限らないけれど特に名鉄はセントレアに行く唯一の電車なので、訪問客が多い東南アジアの言語に対応するなど、もっと多言語対応に力を入れるべきだと思いました。

僕はあまり外食を食べに行かないのですが去年ぐらいに食べに行ったとき注文がタッチパネルの店が多くなっていました。講義を受けるまで僕はタッチパネルになったのは店の方が接客をする手間が省けて楽になるからだと思ってました。そして、働く人数を減らすことで人件費を減らすことが目的だと思っていました。しかし、よく考えてみればタッチパネルにも英語や中国語や韓国語などがありました。これは外国人客が注文しやすいようにし日本人と同じ市民であるというとならえ方ができる一方外国人客が気軽に来客できることにより店側の利益が上がるという店側の利益だけを意図したタッチパネルと捉えることができます。今度お店にいたとき外国語でどのように書いてあるか確認してみたいと思いました。

【あべのコメント：ああいう端末でも微妙に間違っていることがあります。】

…町役場で働く母に書類の言語対応について聞いてみた。最近だとマイナンバー申請は日本語以外に主に英語、中国語(簡体字・繁体字)、韓国語、スペイン語、ポルトガル語での案内があり他にも必要に応じてアラビア語やウズベク語など21言語の資料がダウンロードできる。一方、町で発信する広報などはもっぱら英語、中国語、ポルトガル語、たまに韓国語が加わる程度。十分な語学力を持つ職員がいないことが問題だと言っていた。不就学の子どもに対する取り組みも何年か前から行われているが、数人の子どものために日本語と彼らの言語両方に堪能な人を雇う余裕はないのが現状でそれでも義務教育の間はほとんどの子が学校に通ってくれるので自然と日本語を話せるようになり問題はむしろ彼らの親にあると言っていた。適切な表現ではないが、小さな田舎町では特に年配の方々の頭が固くて「ここで働きたいんやったらまず日本語話せるようになってこんか!」という態度が顕著である。プリントの『言語が「問題」にされてしまうことで…』がこんなに身近なところであって驚いた。学校の先生や授業参観、公民館に集まる大人を対象に彼らの言語のセミナーを開くのはどうでしょう。…

…外国語学部の学生としては、手話をなぜ我が学部に「押しつけ」られようとしたのか不思議でたまりません。外国語学部は語学のみを修める場ではなくなっており、外国学部、と表記する学部と概ね差はありません。そして、仰られた「言語学部」とは学術的性質が異なると考えます。学びの対象は紛れもなく外国の外国土着の言語や物事についての事であり、「日本における日本語以外の言語」としての言語ではありません。外国の事について学んでいることに一切の疑いはないと考えております。…

【あべのコメント：愛知県立大学について言及したのではなく、一般論です。県大なら、日本文化学部でもいいでしょう。国語国文学科という名称が「外国語学部」同様の問題があるわけですが。国語国文学科でも言語学は学べます。なお、日本手話があるように、外国にも手話があるので、手話についても「外国の外国土着の言語や物事について」研究することができます。手話という言語の性質が理解できていないようです。日本手話とアメリカ手話の対照研究、手話をめぐる各国の言語政策の研究、日本手話とイギリス手話の通訳研究…、なんでもできます。手話に関しては、言語学を専門としない聴者が研究してきたせいで、言語学的にナンセンスな「専門書」や「論文」がたくさん出版されてきました。ようやく、ろう者が研究するとか、聴者もろう者の協力を得て研究するという文化が形成されつつある状況です。】

何か国語、というくくりには以前から疑問に思っていました。私はフランス語を専攻しているのですが、フランス語に決めた理由は、フランスというよりむしろフランス語圏の国が多くあるアフリカに興味があったからです。しかし、家族や周りはフランス語＝フランスという認識が強く、「フランスに興味あるんだね」など、フランスという国の話ばかり振ってきます。ここにも、方言とは別の意味ですが、一つの国に一つの言語という前提があるのだと感じました。私は高校時代、電車に乗っているとよく外国人から話しかけられました。話しかけてくる外国人はほとんどの人が日本語をとてもし上手に使っているのですが、漢字が苦手な人が多いようでした。ある時、私が吉良吉田駅という駅で降りようとしたら、外国人の女性が「ここ牛田ですか？」と聞いてきました。牛田とは吉良吉田から1時間ほど遠くにある駅です。その女性は吉良吉田と牛田を漢字が似ていたため間違えてしまったようで、とても気の毒でした。私は牛田への行き方を日本語と、相手が理解していないときは拙い英語で何とか説明しました。電車の車内の表示は工夫がたくさんされているように感じますが、外国人からしたら、まだ分かりづらいところがあると気づきました。緊急時だけでなく、日常から多言語の表示をする大切さを実感しました。

私の中では「英語」という認識でも、iPhoneの言語設定では、英国・オーストラリア・インド・アイルランド・アメリカ・カナダ・シンガポール・ニュージーランド・南アフリカと英語が細分化されています。また私が「中国語」と思っているものでも、広東語（簡体字）、広東語（繁体字）、繁体中国語（香港）、上海語（簡体字）、繁体中国語（マカオ）、繁体中国語（台湾）などが設定から選べます。言葉と国が結び付けられ、英語と言いながらも国ごとの種類がある一方で、中国という一国の中に様々な種類がある、そして日本においての方言とは違う位置づけがされていると感じました。日本では琉球やアイヌが日本の領土となったときに、同化政策がとられ、大枠で見ての「日本語」に統一されたという認識ですが、中国ではなぜ様々な種類が存在しそれらが一言語的な立ち位置を獲得しているのか、中国語に関する知識がないので疑問に感じました。

【あべのコメント：中国国内で「一言語的な立ち位置を獲得している」とまではいえないでしょう。あくまでも「漢語方言」という位置づけです。ただ、それぞれの地域語に話者がたくさんいるのでアイデンティティも確立しやすい。】

外国人の言語相談について着目してみた。多くの外国人にとって誰が伝達するのか、はとても大事のようで洪(2020)の島根県に住む外国人6人とNPO関係者、ボランティアを含む計8人を対象にしたインタビュー調査によると、彼らのほとんどがインターネットを利用する際には日本のメディアではなく出身国のメディアを利用していることが分かった。出身国のメディアからの情報は日本に居住する外国人にとっては安心感が得られるみたいだ。また中には「災害情報みたいに、外国人たちに文化情報についても流してくれるシステムがあってほしい」という声もあった。インターネットのような電子メディアではないが日本の地方特有の回覧板に興味を持つ外国人もいて、回覧板を受け取る時に居住地区の社会に所属感を感じられるようであった。最近になって回覧板の存在は薄れていたと思っていたけれど、確かに手渡し方式であるから自分はこのコミュニティに混じれている、と思わせてくれる重要な存在であると発見した。

また自分のバイト先には英語のメニューがあるが、日本語のメニューにはあって英語のメニューにはない商品があり、限られたメニューしか頼まない外国からの観光客を見ると少しもどかしくなる。翻訳が難しいからメニューを簡略化しているのだけれど、全ての情報が外国人だからといって行き届いていないのは悲しい。

参考：洪秀賢(2020)『外国人住民のメディア利用から見る地方コミュニケーションの課題』

私は「何カ国語」について考えてみた。別の授業でも一つの国に一つの言語があるわけではないから「何カ国語」を使っ
てはいけないと言われたことがあって、とてもその表現について興味があった。そこで辞書で「バイリンガル」と調べて
みたら、「1：2か国語を母語として話すこと。またその人。2：2か国語で書かれている、また話されていること。」
と書いてあった。これは間違っているのでしょうか。なぜ辞書にはこのように書いてあるのか疑問に思った。また「何
か国語」という表現は間違っているのに、どうして広まってしまったのかと疑問に思った。…

【あべのコメント：一般的に定着している表現でも、社会言語学の立場からすると、問題であり、まちがっているとい
うことです。これまでの言語使用について反省をうながすという趣旨が社会言語学にはあります。】

…そもそも「〇〇ヶ国語」という表現をするのは日本語だけなんじゃないかと感じました。（そこまでの言語を知って
いるわけじゃないので、もしかすると同じような表現をする言語もあるかもしれませんが）他の言語では「〇〇ヶ国
語」なんて表現はなくて、「〇〇個の言語」という言い方が主流だと思います。…

【あべのコメント：韓国でも「母国語」「〇〇ヶ国語」とまったく同様の表現があります。母国語ではなく、母語と言
いかえるようになってきていますが、ごく一部です。日本や韓国の社会言語学の力量不足といえるかも。】

私が高校の時に所属していた部活では毎年合宿があり、その時に毎年エスペラントを話す団体と合宿所で偶然一緒にな
りました。その団体はどちらかというと高齢な方が多くて、その時の私はエスペラントとはセカンドライフで楽しむ娯
楽的なものだと思っていました。しかし、この授業で初めて言語の不平等を避けるための言語だと知りました。でも、
私はこの言語は今後あまり普及しないのではないかと思いました。その団体の方々には世界中に友達がいるエスペラント
で話すのはとても楽しいとおっしゃっていましたが、英語が世界の公用語になりつつある現代ではエスペラントを習得
するよりも英語を習得するほうが有益だと思うからです。英語の話者はとても多く、習得すればコミュニケーションの人
数の幅が広がります。さらに英語が非・第一言語として話している人も多いのでその点ではあまり不平等ではないのでは
ないかと思いました。

【あべのコメント：エスペランティスト（エスペラントの理念に共感し、エスペラントを使用する人）に高齢者が多いの
は結果論です。みなさん、若いころに学習したんですよ。流行という意味でも、下火にはなっているわけですが、宮
沢賢治（みやざわ・けんじ）や新渡戸稲造（にとべ・いなぞう）のように、むかしは著名人もエスペラントをやってい
ました。エスペラントはマイノリティ言語ではありますが、だからこそ世界のエスペランティストと連帯感や親密感
をもって交流できるというポイントがあります。「英語ができる」ことでの連帯感なんて存在しませんからね。英語が普及
すればするほど、「英語ができる？ だからなに？」にしかならない。ただ、「日本人なのに英語できるの！」はある。】

私は沖縄県出身なので琉球語にも多少触れてきましたが、本当に外国語のように難解でした。私はかつての日本におい
て方言札なるもので、ただ使っていただけの言語を否定されたことがとても悲しいので、琉球語が独立の言語だと言わ
れるのは嬉しく、このような考え方が沖縄県民の間で当たり前だと思っていましたが、確かに日本復帰を望んだ人々
にとっては日本語の中の一つの方言だと主張したいだろうということに初めて気づきました。同一の言語を使う人々は
その言語に対して必ずしも同じような考え方を持つ訳ではなく、様々な考え方があるということがわかりました。

四日市市役所が多言語で書式を配布していると動画配信で紹介がありました。地元の行政がそのような取り組みをして
いたことを知り、うれしい気持ちになりました。以前のコメントで書きましたが、四日市市では、特別定額給付金につ
いてのウェブページに「がいこくじん の みなさまへ」として、市独自に4か国語で申請書の書き方を公開していま
す。行政が率先して外国人の方々の暮らしを不自由のないものにしようという取り組みは今後も様々な自治体に広がっ
ていけばいいと思います。…

【あべのコメント：リンクしておきますね。 <https://www.city.yokkaichi.lg.jp/www/contents/1588301175958/>】

看板の翻訳が面白かったので、検索してみると看板の英語表記を日本語に戻した例があると知った。その例は「温泉」
の案内看板で、以前の標識の英語表記は「Hot Spring」や「Spa」が多かったが、ここに来て日本語の「Onsen」に変
更したというものであった。その理由は外国人の観光需要の増加や日本文化への理解の高まりに伴うものであった。
なんでもかんでも直訳することが分かりやすさにつながるわけではなく、地域の特徴などを踏まえた上ですべての人にと
って分かりやすい表記を考える必要があるのだと感じた。

参考：<https://hbol.jp/171217>

…国名や地名と同じ言語が公用語になっている国ばかりではもはやないわけですし、少しわかりづらくはなりますが、名前を国名や地名を含まない形に変えることで、外の言語であるという意識を変えていくというのも一つの手なのではないかと私は思います。例えば、世界中に存在を認識されているものをそれぞれの言語で表し、それを言語名にするのはどうでしょうか。例えば「空」ならば、世界中の人が知っていると思いますし、世界中の人が見ることができます。日本語なら「そら」、英語なら「sky」、フランス語なら「ciel」、ポルトガル語なら「ceù」です。いつか「あなたは何語を話すの？」ではなく、空を指差して、「あなたはあれをなんて呼ぶの？」なんて会話になる日がきたら、その時は外国語なんていう言葉は無くなっているのではないのでしょうか。

【あべのコメント：具体的なことについての情報を多言語で表示する場合、たとえば「バスの利用方法」という語句をいろんな言語で見出しにして、個人が選択できるようにすれば、言語名は必要ないですね。一方、言語名だけでなく、国旗をはりつけている場合がけっこうあって、あれはやめてほしいです。「英語」にアメリカの国旗とか！（笑）】

…「東日本大震災における多言語情報」を読んで思い出した記事があります。（聴覚障害者 浸水した自宅に取り残される 救助に来た消防に気づかず 福島/毎日新聞 2019年11月6日）<https://mainichi.jp/articles/20191106/k00/00m/040/295000c> この場合は命が助かったけど、実際に災害が起きて、障がいを持っているために避難が遅れて助からなかった人も多くいると聞きました。私が通っていた小学校には難聴の子がいたので、避難しなければいけない時には教室においてある赤い旗をその子に見せる、というルールがありました。これは外国人や障害者に限ったことではありませんが、何かあった時のための備えをしっかりとっておかなければいけないと思いました。

私は塾でバイトをしている。正直言うと、あまり成績が良くない子を教えている。その教え子がこの前受けもった授業で「なんで英語勉強しないといかんの？」と半ば愚痴のような質問をしてきた。その時、私は何と答えれば良いか分からなかったので何となく「やらないといけないんだから我慢してやりな。」みたいなことしか返せなかった。実際私もこれまで生きてきて、英語を学ぶ意味があまり分からなかった。日常生活の中でほとんど使うことがない言語をなぜ習わないといけないのか、疑問に思いながらも受験のためと思いつつ勉強し続けてきた。しかし、今日の授業資料を見て、そのような「日本人なのに日本語以外の言語を学ぶ理由が分からない」という感情は少し良くないのかもしれないと思った。このような感情が、日本語が第一言語ではない人たちとのコミュニケーションの際に生じる不平等を助長していると思う。英語学習に対する意識改革が必要ではないかと感じる。それが日本在住の外国人に言語の壁を越えて歩み寄る姿勢を養うことにつながると考える。

【あべのコメント：まっとうな疑問だと思います。『「なんで英語やるの？」の戦後史―“国民教育”としての英語、その伝統と成立過程』という本が参考になります。】

…カナダは2言語話すことで有名ですが、私が行ったバンクーバーは英語を話す人の方が多いと思っていたので、殆どの看板にフランス語も書かれていることに驚きました。また、学校のスクールバスも両方の言語が表記されていました。これは少し不思議に思いました。なぜなら、学校では2つの言語を使うわけではないと思うので英語のみの表記でいいのではないかと思ったからです。フランス語しかわからない学生の両親が乗った時のためなのかなと考えました。…

【あべのコメント：象徴的な意味です。英語もフランス語も大事ですということ。たとえば、北海道の市内バスでアイヌ語放送が年にはじまりました。アイヌ語しかできない人がいるからではありません。アイヌ語を復興するためです。】

…先生がYouTubeでおっしゃっていた新型コロナウイルスにおける多言語情報があるのかどうかを調べてみた。「多言語 コロナ」で検索をしてみるとCOVID-19多言語情報ポータル(<https://covid19-tagengo.com/>)というサイトが出てきた。東京外国語大学の卒業生を中心に結成されたボランティア団体による活動の一つで政府や自治体、大手メディアから発せられる新型コロナウイルスの情報を日本に滞在する外国人の方に提供している。優しい日本語を含め15の言語があった。訳されているものがちゃんとしているものなのかは分からないがいくつか分類され、情報が掲載されていた。日本人でも経験したことのない異常事態に混乱しているのに、外国人の人たちはもっと不安に思うだろうし、政府なども手一杯の状況でこのような人たちまで支援が届いていないように見えるので素晴らしい活動だと思った。

【あべのコメント：こういった活動はまさに阪神淡路大震災からの伝統とでもいえるもので、大事にしたいですね。】

私は東北地方の出身です。今は愛知に住んでいますが、日ごろからあまり方言やなまりが出ないようにしています。なぜかという、もし伝わらなかつたら相手に申し訳ない気持ちになるし、田舎者だと思われたくないからです。世の中には田舎の人は都会の人よりも低い地位にあるような雰囲気がある気がします。例えば、地方に住んでいるひとが中心部に観光に行くとき、周りが「あまり上見てきよるきよるするなよ～」など冗談交じりに言ったりします。これは田舎にはない高いビルばかり見ると田舎者だってばれるよ、という意味です。なぜ隠さなければならぬのか、なぜばれたらだめなのかよくわかりません。少数派だから恥ずかしいのでしょうか。（私自身、そのような気持ちは少しあります。）言い過ぎかもしれませんが、同じ国の中でも言語コミュニケーションによる不平等はあるのだと思いました。

…NHKニュースおはよう日本のコーナーのひとつ「けさのクローズアップ」の中で自治体が行う対策について取り上げられていました。その中で私が面白いなと思ったものは、静岡県浜松市で行われた、フィリピンの子どもたちに辞めずに学校へ通い続けてもらうために言葉が理解できない不安を共有するという対策です。日本人児童がフィリピンの言語の一つであるタガログ語を使った授業を体験するというものでした。日本人児童は異なる言語に戸惑いながらも、普段わからない言語の中で生活する友達の不安を共有できたようでした。この授業後フィリピンの子どもたちも少し自信がついたようで、児童間の交流も深まったようです。こうした取り組みは児童間のちょっとした壁を取り払うためにとても有効だと思いました。それぞれがお互いの立場を経験し合うことで優しい気持ちで関わり合うことができると考えます。また記事内では、「環境を整えることは受け入れる側である私たちの責任」という記述もありました。外国人労働者を受け入れていくからには、彼らの子どもの教育権を保障することは当然であると私も思います。国として自治体として積極的な対策が打ち立てられ、外国人の子どもたちの不安が和らぐことをことを望みます。

（参考：NHK NEWS おはよう日本 2020年1月31日（金）「外国人の子ども“不就学2万人” どう減らす？」
<https://www.nhk.or.jp/ohayou/digest/2020/01/0131.html>）

そといきの話し方と、うちむけの話し方という表現がとても分かりやすかったです。私は富山弁話者です。愛知県にも方言はありますが、ベースは標準語だと思うので、大学生活の不安の1つに標準語を話せるかどうかというのがありました。そんなことを気にしていたのかという人もいますが、私は方言に劣等感というかそのようなイメージを持っていて、まわりが標準語の中で田舎者丸出しの方言を話すのは恥ずかしいことだと思っていました。今も標準語に合わせなければ、という思いがあるので、電話等で家族や地元の友達と話すときは完全な富山弁、いわゆるうちむけの話し方で、大学の友達やバイト先の人と話すときは完全な標準語とまではいなくても、ある程度意味が伝わるような方言を交えた、いわゆるそといきの話し方というように使い分けています。先生がコメディアン千鳥さんの岡山弁はテレビ用のもので、完全な岡山弁ではないと言っておられましたが、私のそといきの話し方も富山の人から見ればおかしい富山弁だと思います。…

…私は三重県出身です。三重県は位置的に、中部、近畿、東海など、どの地方に属するのかあいまいなところがあります。そのためいろんな地域の言葉が混ざっています。三重県内でも地域によって違う意味の同じ言葉があります。たとえば、「しあさって」は津出身の私にとって3日後のことですが、四日市では3日後は「ささって」といい「しあさって」は4日後のことなので「しあさって」を使うと勘違いされる可能性があります。「三重弁」のなかにもこのような違いがいろいろと存在するので同じ県のなかでさえ一つの方言としてひとくくりにするのは難しいと感じました。

…同じ方言の中での違い、ということで思い出したことがあります。私の地元の友人には「～やお」「～やおね？」というような語尾を使う人が多くいました。国語の先生がその語尾を大学に出てからも使っていたら「～だお」というネット表現と勘違いされた、という話を聞き、驚いたのですが、さらに驚いたのは家族にその話をしたときでした。家族はそんな語尾使わないでしょ！と別のところに驚いたのです。私は、もしかしたら友人が仲間内で使っているだけなのか、と思いましたがそもそもその話は先生から聞いたものだし、その後大学に入ってからバイト先の先輩が使うことに気づき、同じ地域に住んでおり、同じ名前では呼ばれる方言を使っているにも実は違いがあるんだと知りました。そのようなことを踏まえるとやはり言語を分類する、というのは地域や文化だけで境界を引くのはおかしいのかもしれない、と感じました。

…私は、YouTubeで岡山出身のYoutuberさんの動画を見ますが、見始めのころは「おえん」の意味が分かりませんでした。でも何度もその言葉を聞くうちに、どういうときに使うのかが分かってきて意味も何となく理解できるように…

【あべのコメント：地元在住のユーチューバーは、ガチの岡山弁でやってたりするわけですね。※おえん＝だめ】

ソトムキの方言とウチムキの方言について、先生が岡山弁はソトムキだと抑え気味、ウチムキだと抑えないとおっしゃっていて、名古屋弁はどうかのだろうと思ったため、考えてみました。インターネットの検索バーに“名古屋弁”と入力すると、「でら」「おみゃー」「だがや」「うみゃー」などが出てきました。私は名古屋市在住ですが、このような名古屋弁を日常生活ではあまり使いませんし、聞きません。聞くとすれば、他県の人が話していた名古屋弁です。例えば、私が聞いている東京のラジオ番組で、名古屋の話題になりパーソナリティーの方が話した、「～だがね」「えびふりゃー」という名古屋弁（えびふりゃーはタモリさんの造語なので厳密には名古屋弁ではないのですが…）。これを聞いて、私は話さないため違和感がありました。他にも、名古屋のお土産として売られている物に書かれた名古屋弁を見て、普段使わないような言葉があり、違和感がありました。…

【あべのコメント：そういうことではないです。名古屋弁を例にあげておられるのは、ステレオタイプ化された名古屋弁と、自分の名古屋弁が一致しないということですね。わたしが指摘したのは、アウェイで自分のことばをしゃべるとしても、相手にあわせてマイルドになるということです。こういうことはホームをはなれて生活してみないと、わからないことです。ガチの名古屋弁でしゃべっているわけではないのに、相手に「名古屋弁ってそういう感じなんだー」といわれることがあるのです。千鳥がテレビで話している岡山弁は全然ガチではない、テレビ用の岡山弁だということです。】

ツイッターに面白いハッシュタグがあるのを知っているでしょうか。それは「#方言でキットカット買っておかないといけなかったのに買うの忘れたから買いに行かないといけない」というものです。ちなみに私が言うとしたら「キットカット買ってかんといかんかったのに買うの忘れたから買いに行かんといかん」となります。実際このハッシュタグをみるとわかるものもあればわからないものもあるように日本には多くの方言があることはわかります。…

【あべのコメント：岡山市出身のわたしは「キットカットこーとかんとおえんかったのだから、買うの忘れとったけー買いに行かにゃーおえん」ですね。いろいろほかにも選択肢はありますが。】

…僕の考えではやはり通じない方言同士は外国語ではなく少し変化した日本語です。別言語という認識ですらありません。というのは、日本語の方言同士は文構造が同じだからです。僕は英米学科の授業で諸外国の言語の特徴を学んだときに、似てはいても全く同じ構造の言語は（少なくともその講義の中では）出てきませんでした。方言は標準語と言われる単語に置き換えていけば、同じ文章が作れるので、政治的なまとまりだけでなく、言語学的な観点からも同一言語と言えらると思いました。

【あべのコメント：部分的には文法もちがう場合があります。いくらでも例はありますが、たとえば岡山弁の「いかまーや」は古語ならともかく、現代の標準語に直訳できません。むしろ朝鮮語のほうが単語を置き換えるだけで文章がつくれる（「가지 말자」）。「行かないでおこうよ」という意味。これを岡山弁にすると「行かんどこーえ」。】

私は今まで他県の人と話す機会がほとんどなかったので自分の地方の方言が伝わらなかった経験はありませんが、テレビのニュースやテレビ番組などで全国各地の人が話していることが理解できないというのはよくあります。同じ日本に住んでいて、皆「日本語」を話しているのに、日本人同士がお互いの言葉を理解できないというのはなんだか不思議です。北海道から沖縄までの全ての方言をまとめて日本語と言うのなら、その内の標準語と東濃弁（私の出身は岐阜）しか話せない私は本当に日本語を話せると言えるのだろうかかと疑問に思いました。また、ドラマや映画の撮影で俳優さんが役に成り切るために地方の言葉を練習していることがありますが、それも今思えば、日本人が日本語の練習をするというのは少しおかしいような気がします。…

【あべのコメント：まったくおかしくないです。観念としてしか「日本語」というものは存在しないということです。「同じ日本語」を話していると錯覚しているだけ（実際は、なんとなく、おぼろげに同じなだけ）。世界中の役者が方言指導的なことをうけています。映画のクレジットをよく見ていたらでできますよ。毎日のように地域の人とばかり話をしてる人がたくさんいるのだから、他地域の人とことばが通じないことがあるのは当然のことです。】

今回の授業資料を見て思ったこととして、まず琉球語やアイヌ語は日本語の中の方言として扱われるのか、また、もはや外国語として扱われるのか、その線引きが曖昧だと感じました。…

【あべのコメント：アイヌ語と日本語は祖語（系統）がことなるので、アイヌ語を日本語の方言と位置づけることはできません。配信で説明したとおりです。】

…時代を遡れば「日本語」は中国から伝わり、長い時間をかけて変化したものである。「日本語」は「中国語」の方言であるとも言えるのではないのでしょうか。…

【あべのコメント：いえません。日本語のルーツは中国語ではありません。漢字という文字と漢字による語彙が中国由来ということです。文字や語彙は言語そのものではありません。配信で説明しました。】

韓国人に韓国語を少し教えてもらいました。その時に、たまに日本語と韓国語が似てる言葉、(運動とか準備など)日本語で漢字で表す言葉と似ていると気づきました。韓国語や日本語は中国語をルーツに持つと言えるのではないのかと思いました。

【あべのコメント：いえません。漢語、朝鮮語、日本語、ベトナム語は漢字を媒介にして、いろんな語彙を共有してきました。発音どおりに借用している場合もあります。しかし、この4つの言語は、それぞれルーツはちがいます。たとえば、英語由来の外来語を他の言語にも見つけて「日本語やタガログ語のルーツは英語なんだ」などと思いませんか?】

私は最近韓国語を勉強し始めたのですが、勉強しようと思ったきっかけというのは、韓国語と日本語の文法が似ているということです。YouTubeで韓国語と英語と日本語を比較しながら教えてくれる人がいるのですが(ごく普通の外国人/がっちゃん)、韓国語を覚えた方が英語が理解しやすいとのことでした。このことから、異なる言語の間にも愛称というものがあんだなと思いました。日本語と韓国語は比較的近い言語で、お互い理解しやすいところがあるけれど、他の国からしたら、日本語は難しい言語だと言われるということも相性の問題なのだと思います。相性が悪いから理解できないと、言いたいのではなく、相性が悪いと理解するのが少し大変になるということがいいたいのです。本当にお互い難しい言語だとしても、わかるうとする気持ちがあれば伝わるものだと思います。…

【あべのコメント：日本では英語しか学習しないことが多いので、日本語と文法がよく似た言語についてほとんど知らされていないのですが、そういう言語はけっこうあります。朝鮮語、モンゴル語、トルコ語など(もちろん、たまたま)。語彙という面では漢字圏の言語(漢語、朝鮮語、ベトナム語)は日本語話者にとって学習しやすい。発音の面ではスワヒリ語とかイタリア語なんかは、学習しやすい。一方、朝鮮語は日本語話者には難しい発音が多い。そういった学習の容易さ、困難さを「言語的距離」「言語間距離」として説明する場合があります。】

…ツイッターに厳格に情報源や正確さを求めるとツイッターである意味がなくなるのではないかと思います。ツイッターに関して言えば、情報を提供する側が「質」にこだわることよりも、受け取る側の人々が情報の正誤を吟味し、取捨選択をすることが重要なのではないかと思います。

【あべのコメント：英語でツイッターのようなSNSをソーシャルメディアといいます。利用者もたくさんいます。なので責任のあるツイートが求められますし、運営会社も、メディアとしての公共性を重視した対策をとる必要があります。それだけ影響力をもつツールだということです。悪質なツイートを拡散すれば処罰されることもあります。】

公共の表示は、その言語を熟知した人が訳したものを使用しており、正しいものだと思い込んでいました。これは日本だけの問題ではありません。海外でも同様なことが起こっています。ある海外の観光地付近の民間の家の壁に、「静かをありがとう」と日本語で書かれていました。おそらく、翻訳機械を使って訳したのだと思います。…

私が最近気になることは、多言語がプリントされたTシャツです。海外で売られていたTシャツに「贅沢な」「究極乾燥」「異星人」などとプリントされているものがあり、着ている人は意味がわかっているのかと疑問に思うものもありました。中には、平仮名と中国語が混じったものもありました。韓国人の友人も、商品にプリントされている韓国語はおかしいと言っていましたから、珍しいことではないようです。これは、日本で販売されている物も同様です。日本では英語がプリントされているTシャツが多くありますが、その中には間違った英語も多くあります。私は日本だけでなく、外国語がプリントされている商品はかっこいい、おしゃれだと思えるだけでなく、正しく言語を使い、意味を知ること大切ではないかと思います。そこに書かれている言葉の意味を理解することが、多言語を考えるきっかけになるかもしれないと考えるからです。例えば、Tシャツのタグにプリントされている意味を書くなど生産者や販売者も消費者に意味を伝える工夫をしてもらえたらと思います。

【あべのコメント：1999年に中国にいったときも「新感覚ダイエット」というTシャツを見かけました。意味不明な英語のTシャツも日本で売られつづけていますね。デザインをあれこれ考えるのが面倒だから安易に作るのでしょうか。】